

民衰記

または

経世済民

酒蔵がいっぱいのもりなら
たとえ最後の一本でも
気分良く飲める。

酒蔵が本当にいっぱいでも
扉が開かなければ
それが最後の一本だ。

世の中って、そんなもんさ。



ハイイ、世田谷ネコのタマだよ。翻訳は絶好調ですって言いたいけど、市界文書を整理していると毛糸が絡まったみたいになるんだ。それで、少しほぐすために、今回はスピントオプ的な『ユダ一代記』みたいなのを。髑髏ヶ丘でイエスと別れた後、ユダは何をしたか？かなりの大活躍なんだよ。

またネコは出てこないから少し淋しい。一匹だけ小さなイラストで参加してる。探してね。

それにしても貧乏性っていうか、ユダはあちこちウロついている。さすがオスだね。子どもも沢山作ったし、ま、それはいいや。この文書の元になったのは神の目無人機からの中継で、無人機は年々進化して、このお話の後ろ半分では、通称『ミツバチ』っていう超小型の神の目が使われたんだって。自走式のネズミ型カメラも寒い地方では役に立ったらしい。こういつた機材はまだ残ってて、クレムリンの地下三階秘密倉庫で動態保存してるって聞いた。

ナザレテレビで『ユダの大冒険』のタイトルでストリーミング配信したものを書き起こしたのが翻訳元のテキスト。実際の映像も少しだけ残ってるって話だけど、アタシはまだ見てない。見たいなあ。なお原典の線文字B文書はソビエトルーシ社会主義共和国連邦のネコペディアで読めます。

んじゃ、どーぞ。

蔵小路タマ

ビジネスモデル

ユダは考えた。

個人が起す宗教ムーブメントとしては、あの辺までが精一杯だったろう。たった三年の成果と思えば、これ以上は望めない。よくやったよ。旧宗教に決定的なダメージこそ与えられなかったが、一悶着は起こせし、ずっと思考実験していた世論操作の実証実験もできた。やはりあの程度のことでは動くんだけ。

俺にしても布教活動をしていたときはイエスの教えに没頭していた。だからどこにも嘘はない。イエズス会の十一人はあれが限界。最初から器量の小さい連中だったからな。これから一生同じようなことを布教していればいいさ。イエスは無垢で純粹な子どもだ。死なせなくてよかった。でも、一体どこに消えたんだらう。帰ってくればもう一幕できるのに。

ベツレヘムに帰ったユダを待っていたのはイザヤの死の知らせだった。街中に喪章が掲げられ、全町

民が喪に服していた。人々はお悔やみを述べ合い、「惜しい人を亡くしました」「街の経済が停滞しますね」などと言っている。本当かよ。ユダには信じられなかった。全部義理だろ。親父が死んで悲しむやつなんているのか。「もっと早くくたばればよかったのに」とか「せめて今月だけは質は流すな」ならわかるが。それに、なんと神の子劇場まで歌舞音楽を控えるといっただけだった。

どうしてもっと素直に喜ばないのか。何故父にそれほど気を遣うのか。死んじまったらもう顔色を伺う必要もないだろうに。カラスさえ鳴かない表通りを歩きながら、ユダは不思議で仕方なかった。

ベンダサン商会は開店していた。喪中の札もなく、社員たちは何事も無かったように働いている。古手の番頭がユダをみつけ、「お帰りなさいませ。こちらに」と奥の間に案内した。ユダも「ああ、今帰った」と、温泉旅行から戻ったような返事をした。

「お父様が突然亡くなられて、さぞお気を落としてでしょう。お察し申し上げます」番頭が言った。

「多少旧聞に属すがな」

「いえいえ、三日前のことですよ。流行り病で」

「そうかいそうかい。わかったよ。それより、今は誰が仕切ってるの」

「わが社のトップはイザヤベンダサンです」

「三日前に死んだら？」

「ですから山本八平様が二代目を襲名なさいました」

さすがにユダはむっとした。影武者ならいいが、成り代わりやがるとは。

「気に入らないな」

「そうでしょうか。すでにイザヤベンダサンは人格ではなくブランド化していますから、へたに変えないほうがよろしいかと」

「ああ、よろしいだろうよ」

ユダは知らなかったが、父の本名は山本七平で、イザヤベンダサンはペンネームだった。神の子タワシの前にやっていた古本屋は山本書店といったらしい。

女郎屋も酒場も休みなので、ユダには居場所がなかった。といって、街に出ればあちこちからお悔やみの言葉が飛んでくるに違いない。答えを考えるだけで面倒だ。店の空き部屋に座ってビールを飲むことにした。

部屋の壁には『ベンダサングループ組織図』なるものが貼ってあった。ベンダサン商会を中心に、数え切れないほどの子会社がある。仕事内容がわからないものも沢山あった。特に興味があるわけではないが、とにかくヒマなので、通りかかった年寄りを捕まえて組織図の説明をさせてみた。

ユダの想像もしなかった世界がそこにあった。これほどまでに巧妙で、これほどまでに非合法ではない組織的詐欺を今まで見たことがない。グループの構成は磐石で、どうやっても損しない仕組みになっていた。損しないどころか、寝ていてもカネがジャカジャカ入ってくる。

「こんなの、誰が考えたの？」と訊くと、

「先代のイザヤ様です」と老人は答えた。

そうか、それで街中が喪中なんだ。ユダはやっと納得した。

すべての危険因子をグループ外に追いやっているのだ。相場がどう転んでもグループにはメリットになる。その徹底ぶりは見事としか言いようがない。

たとえばローマに貸し付けた一千万タラント。十年後に二千万タラントになって返ってくる約束のもの

のだが、ベンダサンはすでに二割の利子付きで回収し終わっていた。そして十年後にローマが返済してきたとき、さらに二割の利子が取れる。これらはすべて合法だ。返済不能などのリスクはどこへ行ったかという点、他民族系の銀行や一般民衆に負わせていた。

普通に考えれば、ローマとの約束を信じて、資金を十年間塩漬けしておけばカネは二倍になる。しかしカネを動かしてこそ商人だし、万が一ローマが破産したら、十年待っても何も返ってこない。危険を冒してバカみたいに十年待つか、多少儲けは減るが今すぐ貸金を回収して次の事業に回すか、考える余地はない。といって、誰か他の金持ちに「ローマに貸した一千万タラントの借入書を買いませんか」なんて持ちかけたら、足元を見られて買い叩かれてしまう。いいところ五百万タラントくらいにしかないだろう。

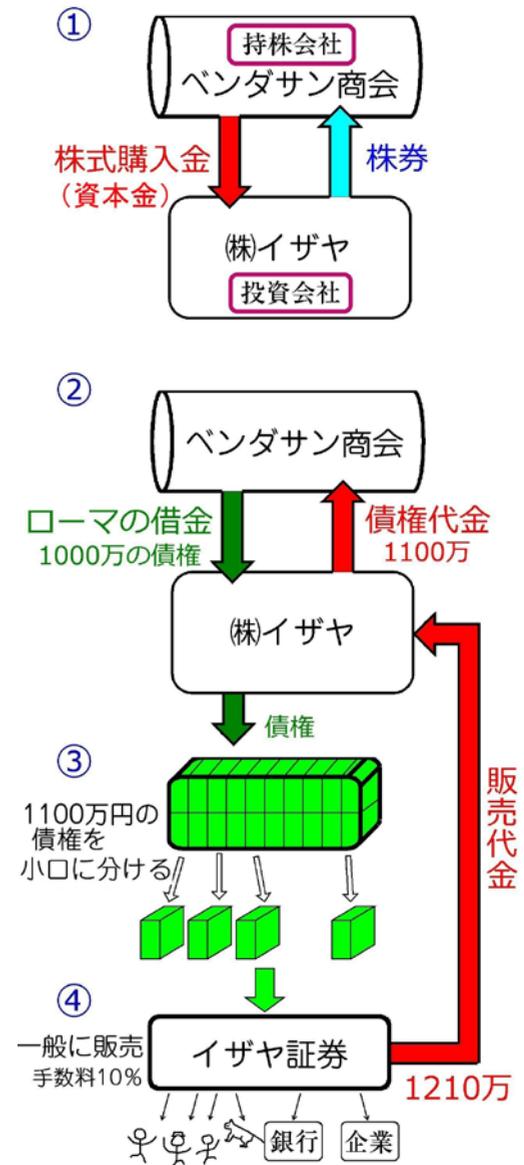
そこでイザヤの悪知恵が覚醒したのだ。まず、いくつもの完全子会社を作った。いろいろな使いみちを想定して五十社ほどだ。すべて株式会社で資本金は全額ベンダサン商会が出した。

完全子会社に資本金を全部出すなら、そんなもの作る必要はない、と思うかもしれない。真面目に考えればそうだが、合法的にリスクから逃げるには子会社化したほうがいい。

株式会社が失敗して潰れた場合、いくら負債があったも資本金の額までしか補償しなくていいという法律がある。たとえば資本金が百タラントの株式会社だと、何億タラント借金があっても百タラントさえ返せば、あとは合法的に踏み倒せる。もしそれが子会社ではなくベンダサン商会の仕事だったら、とても百タラントでは済まなくて全額返済になるだろう。そこで、多少危ない仕事は子会社にやらせ、儲かったら吸い上げて、潰れたら知らん顔をする。

とてもヘンな仕組みに思えるが、そもそも株式会社は、広く世間から資本金を募って起業するという本来の姿がある。資本金を出すのは一般民衆でもあり得るので、株主（出資者）保護のため、こんなルールがあるわけだ。それを隠れ蓑に使うのがベンダサン商会をはじめ、世の多くの大資本家だ。泥棒予備軍は法的に保護されているのだ。

話を戻して、ローマへの貸付金のからくりは、ま



ず株式会社イザヤという投資会社を作ることから始まった。もちろん完全子会社で、所在地はベンダサン商会とまったく同じ。書類上の社長には一番番頭が就任した。商会は資本金として一千万タラントを(株)イザヤに払い込み、(株)イザヤは株券を商会に渡した。といっても、これは建前で、株券など存在せず、実際には何も起きていない。とにかく(株)イザヤは創業したのだ(①)。

次に、商会はローマから受け取った一千万タラントの借金証文を(株)イザヤに売った。その代金は

一千万タラントで、即日(株)イザヤから商会に払い込まれた(②)。もちろんこの段階でも何も起きていない。カネは商会の金庫に眠ったままだし、借金証文もイザヤベンダサンの机に入ったままだ。大切な証文を机から外に出すなど、イザヤベンダサンは絶対にしない。

次に初めて動きが出る。商会の丁稚たちが千枚の紙を用意し、一枚ずつ丁寧に「ローマ債権一百万タラント十年後に一百万タラント払い戻します」と書き、一番番頭がサインする。これでこの紙が

一万一千タラントのカネと同価値になる。この③の工程では、ローマの借金を千分の一ずつに分けた。つまり債権を小分けして小額の多数の債権に換えたわけだ。一般人に一千万タラント出せといっても無理な話だが、一百万タラント程度なら小金持ちでも出せるだろう。

千枚の紙は、やはり完全子会社のイザヤ証券に持ち込まれ、営業マンが言葉巧みに売り払った。額面は一百万タラントでも、売るときはもっと高い。(株)イザヤは一万一千で仕入れているので、安くてもそれ以下にはしないし、客が欲しがれば値はもっと上がる。さらに証券会社の手数料として、売値の十パーセントを取る。つまり客は、安くても一百万二千百タラント払わなければ債権は手に入らない。

そうまでしても多くの客がこの債権を欲しがらる理由は、大きく分けて二つある。カネを天井裏や床下に隠しておいても絶対に増えない。債権にしておけば、十年後には五割近い利子が付く。どうせ寝かしておくとカネなら増えるほうがいいに決まっている。また、もし何かあって、他の人がこの債権を欲しがったら、うまく行けば一百万五千タラントで売れるかも

しれない。債権に定価はないのだ。なにしろ世界第一の強大国ローマの債権だし、扱っているのが大富豪で信用のあるベンダサン商会だ。疑いなどどこにもありはしない。

かくして、イザヤ証券の営業社員は、それほど努力することもなく債権は完売する。売り上げの、最低でも一百万二千百タラントは(株)イザヤに代金をして支払われる。思い出してもらいたいのは、(株)イザヤは商会と同じ住所、同じ事務所、同じ机ということだ。結果としてベンダサンはローマに貸したカネをすぐさま取り返し、もう二割も儲けた。

十年目の満期が来てローマが二百万タラント返してきた場合、イザヤ証券は顧客の債権を一百万八千タラントで買い取る。千枚で一百万八千タラント。ここでもイザヤグループは二百万タラント儲かる。

もし、世界がひっくり返るなどしてローマが減じた際には、債権はただの紙くずになる。だって、債権は借金証文だからだ。借り手が返せなくなったら、どうやってもカネは取り戻せない。(株)イザヤも商会も、絶対に返ってくる保証などしていない。債権とはそういうものだ。だから利息が良い。

万が一ローマが破産した場合をもう少し考える
と、踏み倒された借金を背負うのは債券を買った民
衆などだ。商会、(株)イザヤ、イザヤ証券は痛くも痒
くもない。だって、小口債権にして売ったとたん、
すでに貸したカネは取り戻しているのだから。

もちろん民衆は騒ぐだろう。どっと押しかけてく
るに違いない。そうになったらイザヤ証券を破産させ
ればいい。窓口がなくなれば文句を言う先もなく
なる。イザヤ証券も商会の完全子会社の株式会社な
ので、資本金の額まで負債を引き受ければ済む。そし
て資本金はたった一万タラントでしかない。

それでも収まらなければ(株)イザヤまで倒産させて
構わない。子会社ならまたいくらでも作れる。この
ように、グループ本体はどうやっても安全で、カネ
は黙っていても入ってくる仕組みだった。

ここで注意すべきは、顧客が買った小口の債券は、
ローマが出した借金証文そのものではない、という
事実。トチ狂った客が債権をローマに持って行って
も完全に無視されるだけ。ローマの言い分は、借り
たのはベンダサン商会からであって、それ以外の人
間に返すいわれはない。これは正当な理屈だから、

マネーゲーム

経済とは経世済民のことだという。笑っちゃうね
とユダは思った。多分、民とはカネを持って人
間だけだろう。確実に儲かるのは金持ちだけだから
だ。民衆は、自分の持っている債権が紙くずになる
とは夢にも思っていない。多少危ないと感じても、
なにしろ世界一の大国ローマの債権だし、発行して
いるのは天下一の豪商、ベンダサン商会の子会社だ。
寄らば大樹の陰、何も考えずに安心することにして、
不安はその都度吹き払ってしまう。

こうなると金持ちにはさらに好都合な雰囲気
が世の中に出来る。民衆は自分の債権が期日に現金
化されるよう、ベンダサン商会が損したり潰れるの
を嫌うようになる。これまでは守銭奴としてあちこ
ちで嫌われていたが、今は民衆の味方ベンダサンに
なった。ローマも同じで、ローマが肥え太って借金
を楽々返せるよう、民衆はせつせと納税した。脱税
する奴は大悪人だ。少しずつ確実に、貧乏人こそ大
金持ちの最良の友になってゆくのだ。

客は自分には何の権利もないことを知ることにな
る。

この上なく素晴らしい仕組みではないか。ユダは
感動さえ覚えた。世の中の法律やシステムは金持ち
が儲けやすくできている。いや、金持ちにしかな
らないようにできている。それを活かし切っている
のがベンダサン商会だった。

笑いが止まらぬほど儲かっているベンダサン商会
を見て、他の金持ちも同じようなことを始めた。他
人のカネの貸し借りでも、それらはすぐさま債権化
され、手数料を取って売られた。単純な貸し借りで
はなく、たとえば沈没船から財宝を引き上げると
いった話も立派に債権化できる。返済額を記入せず、
手に入った財宝の何%が分け前かが書かれてい
ればいい。世の金持ちはこそってリスク回避と資金調達
のために債券を発行した。一方、民衆は『安全な』
投資先を求め、あるいは一攫千金を夢見て債権を買
いまくつた。そして、あつという間に世の中に債権
というただの紙切れが溢れた。

なお、後世に起きる経済恐慌は、すべてこのよう
な『借金』や『債権』が引き金になっている。

イエスが見たら何と言うだろう。いくら神の子
でも、ここまでうまく騙されている民衆を覚醒させる
のは無理だろう。あきれ返って、今度は本当に荒野
へ修行に出てしまいかもしれない。まさに神に見捨
てられた世の中だなあ。

債権が世の中で一般化し、何千種類にもなると、
債権の売買が行なわれるようになった。少しでも有
利な債権を安く買いたい、利回りが悪かったり多少
危険な債権は売り払って現金化したい。

いつしかそんな人たちがエルサレムの街角に集ま
りだした。最初は数人が声を掛け合っただけで、道
を売買していたが、それがすぐに何百人になり、道
から溢れて通行の邪魔になり始めた。

この光景をベンダサンが放って置くはずがない。
大金持ちの仲間とつるんで、エルサレムの嘆きの壁
近くにエルサレム証券取引所というものを開設し
た。金持ちどうし、普通は仲が悪いが、共通の利害
があれば簡単に野合する。

取引所の仕事は売り手と買い手を引き合わせ、売
買する債券の相場を教えることだった。取引成立で

両方から手数料が入る。手数料は微々たるものだが、一日に何千万という債権を扱えば、塵も積もってとんでもない大金になった。

ここまで来ると、債権とは借金の返済を受ける権利であり……などという根本原理は忘れ去られた。紙と数字が舞い踊った揚句、全部がバーチャルな取引なのに実際に損したり得したり、大富豪になったり夜逃げしたり。悪魔しか考え付かないようなマネーゲームが、ごく当たり前に展開された。

おいしい食べ物には虫が寄ってくる。それまで競馬場の裏手で屯していた一群の詐欺師たちが証券取引所に居場所を変えた。彼らは朝一番で、投資にやっ来て来た客に眩く。「今日はナポリ果物の債権が値上がりしますぜ」などと、様々な銘柄を一人ずつの客に言うのだ。そして夕方、上がった銘柄を教えた客に寄って行ってチップをねだる。元手は一切かからない。銘柄と、それを伝えた客を憶えておけばいいだけだ。いわゆるコーチ屋、後の世では投資顧問などと呼ばれる人種だ。

少し元手と才覚のある連中は完全な博打を始め

ユダはそのカネで、人気のある債権と株式を百銘柄、買えるだけ買った。そしてエルサレム証券取引所にあるベンダサン商会の倉庫を改装し、ユダキャピタルという看板を出した。

どうせギャンブルなら、もっと面白くてもいい。これまで客は、債券や株式をまず買わなければならなかった。どうして『売り』からではダメなのか。ユダは債券を貸す仕事を始めたのだ。

客は、値下がりしそうな銘柄の債権・株式をユダキャピタルから借りて売り払う。そして値下がりしたら買い戻してユダに返す。もちろん無料ではない。ユダは額面の1%を一日の手数料として取った。また、貸し出す際には額面金額の保証金を入れさせ、返却時に返した。これで客は『売り』からもギャンブルでできるようになった。

客たちは、ユダキャピタルがベンダサン直系だと知っているので、債権を持ち逃げなどできない。しかし、時には見込み違いで大損をし、逃げるしかない客もいた。そんなときにはベンダサン商会の用心棒が面倒を見ることになる。最悪の場合、不運な客は土左衛門と名を変えてヨルダン川に浮かんだ。

た。見込んだ債券や株式を買い、値上がりしたら即座に売る。後の世でいうデイトレード。債権には「買ったら何日持っていなければいけない」なんていうルールはないから、買ったその場で売ってもいい。取引所の手数料以上に値段が動けば、そのまま現金で儲けが出る。

儲ける奴がいれば損する奴も当然いる。借金してまで債権に手を出して、田畑売り払ったという話も珍しくなくなつた。取引所の玄関前は、競馬場や競輪場とさして変わらなくなつた。それでも一応は『経済活動』なので、「競馬で儲けてね」より「いやあ、債権でちよつとカネが入りまして」のほうが、どことなく聞こえは良いようだ。実態は同じギャンブルなのに。

ユダはしばらく静観していた。世間がどれだけヒートアップするか見ていた。

ある日のこと、ユダはベンダサン商会の一番番頭に「一千万タラント貸せ」とすごんだ。ついでに「昨夜お前が記帳しなかった二件の取引をイザヤは知ってるのかなあ？」とも独り言を言った。番頭は一千万タラント持って来た。

ユダの事業は順調を極め、半年足らずで保有債権の含み資産は十倍になった。もとよりユダは金儲けが目的ではなく、面白そうだから実験してみただけだ。儲かるとわかつたら、もうやる気がなくなつてしまった。ユダは事業全体をベンダサン商会に一億タラントで売った。商会はその事業をイザヤ証券に継がせた。後年、証券会社が『売り』から入る客に株を貸すのは、この時が初めてである。

もっと楽しい事はないかな。ユダは次の企みを実行に移した。一億タラントで取引所の近くに建物を買い、新聞社を始めたのだ。社屋が嘆きの壁の通りに面していたので、社名を壁通り新聞にした。後年のウォールストリートジャーナルの前身である。

当時、カナンの神様はプリンタを持つていたがユダにはなかった。印刷機もまだない。そこで、きれいな字を書ける人間を千人雇った。夕方、各銘柄の終値をリストにして紙に書かせ、大きく値が動いたら大きな取引高があった銘柄を「本日の注目銘柄」として、そうなった理由をコメントした。これはユダ自身が書いた。要するに、損した人、得した人の

両方が納得するような、もつともらしい話を書けばいいのだ。それも結果がわかった上だから、全部後付の理由で構わない。たとえば、ガザ箆編み商事の株が上がったら、「スペイン地方の気候が良いので、今年のオレンジは豊作間違いなしであり、箆の注文が増えるとの見込みから買われた」だし、ナポリ沢庵が下がれば「ローマの国境はどこも安定していて、兵隊の弁当に入れる沢庵の需要は先細りとの観測から」などと書けばいい。嘘でも本当でもいいのだ。もつともらしければ充分だ。これは後年、証券アナリストと呼ばれる人たちの分析手法でもある。

半年ほどで新聞社は大儲けし、投資家たちの間で壁通り新聞は不可欠のメディアになった。そしてユダはこのときを待っていた。

終値とともに書く「本日注目銘柄」に加えて「明日の有望株」というコメントを掲載し始め、値上がりする銘柄を予測したのだ。逆に値下がり銘柄も書いた。株価が動く理由ももちろん書いたが、これもまた、もつともらしければ何でもよく、説得力だけが勝負だった。

ユダの思惑通り、値上がりを示唆した銘柄は値上

がりし、値下がり銘柄は思い切り下がった。

株価や債券の値段なんていうものは、本来は实体经济の影響などほとんど受けず、投資家たちの心理だけで動いていると、ユダは常々そう思っていた。壁通り新聞の「明日の有望株」で、それは見事に証明された。しかし新聞読者の反応は逆といえれば逆で、壁通り新聞の株価分析は鋭く、明日を見通す判断力は素晴らしい、というものだった。原因と結果を取り違える人は、太古の昔から大勢いるのだ。

つまり簡単に言えば、ユダは新聞を使って株価操作をしていた。もつと儲ける気になれば株・債権の売買でいくらでも稼げたが、ユダにその気はなく、人間の愚かさを如実に見るだけで喜んでいた。

「明日の有望株」に、ユダがどの銘柄を取り上げるのかを探ろうと、怪しげな男たちがユダの周りに見え隠れし始めた。これでは安心して女郎屋にも行けない。あまりに鬱陶しいので、ユダは新聞社自体をダウとジョーンズという同民族の若者に十億タラントで売ってしまった。

そしてエルサレムから姿を消した。

ある謀略

半年後、ユダはガリア地方の寒村、パリにいた。ルテティアとも呼ばれる村でローマ軍の駐屯所があり、その周囲だけは一応ローマ風だが、一歩外れると、とんでもなく未開野蛮の地だ。この辺の人間は食器を一切使わず、素手で物を食べた。もつと驚いたのはトイレがどこにもないことだ。そういう場所には不要らしい。住民は誰でも、若い女性でさえ好きな場所でする。道の真ん中でも店先でも。

ちよつと田舎過ぎるなあ。ユダは遠くまで来過ぎたと思った。人間の生活を考えようとしているのに、これでは動物園でサルでも調教したほうが得るものは大きいかもしれない。多少の文明がないと、ユダが考えている社会実験はできない。だめだ、ガリアは。この地が文明化するには、あと数千年はかかりそうだ。

それでも、物珍しさも手伝って、ユダは一ヶ月近くパリに滞在した。軍営近くの女郎屋が快適だったせいもある。

明日ベツレヘムに帰ろうという日、見るからに異臭がしそうな外套を厚着した数人のひげもじやの男たちと出会った。遠くから歩いて来たらしく、疲れていてカネもたいして持っていないかった。ユダは彼らに酒をおごり、どこから来たのか尋ねた。

リーダー格のレーニンと名乗る男が、我々はルーシから逃げて来たのだと言った。ルーシ？ はてどこだろう？ ユダには初めて聞く地名だ。レーニンの説明によれば、ルーシはここから北東の方向の最果てにあつて、冬になると雪に閉じ込められ、夏は蚊が空を覆い息もできないという。なんだか暮らしにくそうな土地だ。しかし農産物は豊富で、鍛冶屋やその他の職人も大勢いて「こんなパリなんかよりずっと進んでいる国」だそうだ。

ユダは興味を持った。もしかすると探していた国かもしれない。その夜は全員を女郎屋に泊め、ユダが支払いをした。

ルーシでは食料も雑貨も全員に行き渡るほどあるのに、ほとんどすべての民が飢え死にしかかっていると。それもこれも女王が政治を省みないせいだ。自分の王宮だけきらびやかに飾り、町では悪徳

商人がのさばり返っている。レーニンたちは女王の暗殺を企て、それが露見したために国外逃亡したという。

「すごいじゃん！ここだよ、探していたのは。ユダは飛び上がらんばかりに喜んだ。」

「もしかすると私が助けてあげられるかもしれない」ユダは切り出した。「飢えた民衆に食べ物を行き渡らせ、悪徳商人を駆逐できるかもしれない」

「女王を殺すには、もっと大きな投石器が要る」レーニンが言った。

「女王なんかほっとけ。天と地をひっくり返すんだ。奴隷が王様になって、王族が奴隷になるのさ」

ルーシ人たちはユダは狂っていると思い、顔を見合わせた。

ユダは一冊の本を取り出した。東ガリア出身でユダと同民族のマルクスという夢想家書いた社会科学小説だ。「読んでみな」ユダは勧めたが、ルーシ人たちはガリアの文字もケルトの文字も読めないと言う。読めるのはルーシの文字だけらしい。近々誰かに翻訳させよう。

ユダは一晚かかって本の要旨を説明した。その社

する。農民は組合を作り、組合単位で作物を生産する。工業では工場主を追放してやはり組合を作って労働者自身が工場を経営する。

「そうすればどうなると思う？」

「うまく行くかなあ。誰が命令するんだ」

「命令なんか誰もしないよ。みんなで話し合って決める」

「話し合いは苦手だ。特にルーシ人は」レーニンは渋い表情だ。

「あのなあ、祖国をどうにかしたいんだろ？苦手もクソもあるか」

つまり、国民はみんな働く。働いて正当な報酬を得る。誰もカスリを取ったりしない。そうすればみんな豊かになれるだろう。……この簡単な理屈が、石頭のレーニンたちにはなかなか理解できないようだった。

「わかったよ。こう考えればどうだ。今国を牛耳っているのは女王とその取巻きだ。そいつらを追い出して、代わりにそこら辺の労働者が世の中を仕切るんだ。農村や工業地帯から労働者の代表を選んで、みんなで会議して考えればいい。ルーシ人の中にも

会では貧富の差は極端に小さく、適正に働けば生活に必要な食料や物資が何でも簡単に手に入る。誰にも蔑まれず、誰を敬えと強制されることもない。社会が充分に成熟すればカネさえ意味を持たなくなつて、金持ちも貧乏人もいない完全に平等で自由な生き方が全人民に約束される。

「どうやればそんな魔法が使えるんだ」レーニンが訊いた。

「魔法ではない、科学だ。すべてが筋道立って理論化されている。そろそろ人類も、獣のような弱肉強食から抜け出して、科学的に正しい社会を作ってもいいんじゃないか」

そのためには、順番は決まっていなが次のような改革をしなければならぬ。これは革命と呼んでもいい。

いわゆる仲買人にあたるすべての職業を廃止し、農産物や工業産品の移動を国が管理する。国というのは人民そのものだ。女王など入る隙はない。

生産者は一番偉い。働く人がいなければ何も生まれないからだ。だから、たとえば農業なら、すべての地主を追放して、農地をそこで働く人民のものに

たまには頭の良い奴もいるだろう？」

「多分ね、何人かは」

「選ばれた連中が女王と同じように自分の利益だけ考えたら元も子もない。みんなのためだけを考える。できるかな？」

「自信はないが、やつて損もないだろうな。失敗しても今以上に悪くなりそうもないからね」

ルーシ人たちが諸手を挙げて賛成することを予想していたユダは、この返事に思い切り気抜けした。なんだよ、ネガティブオプションかよ。寒い国の連中だから自発的に動く習慣がないのだろう。先が思いやられるなあ。

それじゃあ、少しくすぐってみるか。ユダはタラント金貨でテーブルに山を作ってみせた。このとき、レーニンの顔が初めて微笑んだ。

「どのくらいある？」レーニンが訊いた。

「さあ、十億タラントはすぐに用意できる。必要なら、あと百億くらいまでなら」

「どこの国の金庫から持ち出すんだ」

「国じゃない。会社だ。俺がこれから潰そうとしている仲買人のような会社だ」

「まあ詳しくは聞くまい。それで見返りは？」

「たいしたことはないよ。そうだなあ、あんたたちが国を仕切り始めたら、軍隊の装備全部を俺から買ってくれ。高くはしない。他より安くする。それから、できれば小麦を、相場より少しだけ安く売ってくれると嬉しいかな。量はどれだけ多くてもいい。すべて現金で決済しよう」

「すごく妥当な話じゃないか。もつと無理を言われるかと思った」

「俺たちの民族は無理なことは要求しない。当たり前前やってしぶとく小銭を溜めるのさ。そうそう、俺自身にはメードとしてかわいい女の子を二人ばかり付けてくれるか？それができれば一兆タラントまで用意するよ」

「任せろ。五人付けよう」

全員で何度も乾杯した。

ルーシ人に難しい話は無理だ。しかし具体的な拳兵に話が移ると目を輝かせて雄弁になった。まず首都のノヴゴロドを制圧する。ほぼ同時に各地方都市と南のキエフ公国でも反乱を起こす。軍隊と警察を

事前にカネで買収し、民衆の蜂起を黙認させる。民衆は治安機関に押し入り、武器を奪って金持ちを追放したら、なるべく略奪はせずに権力を地域の評議会、すなわちソビエトへと委譲する。

下準備に、各地で非合法集会を開いて『農地を農民の手に』『工場労働者は奴隷ではない』等々、わかりやすいプロパガンダを連発しておく。これは一ヶ月程度でいい。長いとダレるし、短いと気分が乗りきらない。

準備期間にオルグが大学等に入り込み、各地でソビエト創設時に必要な、多少頭の良い人材を百人程度確保する。同時に特捜隊が物流業者を調べ上げ、経営陣を絞首刑にしても組織が機能し続けるよう研究し、できれば凶上シミュレーションを実施しておく。

大体こんなものだった。細かいことはその場で決めるしかないだろう。理論的側面も、騒動が落ち着いてから徐々に整理して行けばいい。何が起きるかわからないのだから、特にルーシでは綿密な計画は不可能だ。

ルーシ人たちは、これで計画が成功したような気

になっていた。「まだだよ」とユダは言った。プロパガンダ用に大量のビラを作らなければならぬし、全国を網羅する連絡網も必要だった。

ビラはユダが下書きし、わかりやすいように図版や漫画も入れ、ルーシ人がルーシの文字に直した。農村部用、都市部用等に分けて五十種類くらいビラを作った。立て看板の見本も作ったし、何より国旗をデザインした。労働者の国になるのだから、草刈鎌とトンカチをブツ違いにした図案がいいだろう。色をいくつも使うと染料が不経済なので、赤一色にブツ違いを黄色で入れるシンプルなものに決めた。

その後、民衆蜂起を起こす都市をめぐって、ルーシ人たちが大激論を始めてしまった。あっちよりこっちの町が大きい、とか、ここは小さくてもカネがある、とか、ユダに言わせれば「どうでもいいだろう」なのだが、彼らは大真面目で口角泡を飛ばした。結局、労働者数が多い町を優先することにして、最初の蜂起都市、三十箇所が決まったのは十三日後のことだ。

頼むから本番では仲間割れしないでくれ、ユダは祈るしかなかった。

大社会実験

ルーシの農民や労働者は、よほど苛められ尽くしていたのだろう。暴動はすぐに起きた。南のキエフ公国でも、全土とはいかないけれど、北部の半分以上で地主の追い出しに成功しソビエトが勝利した。これで小麦の大生産地が手に入った。農業はもう心配ない。ユダは満足していた。マルクスという奴の小説は、もしかして未来をかなり言い当てているのかもしれない。ただ、今後も順調に行くかは、やってみないとわからないけど。

各地のソビエトが全土を掌握し、流通機構もレーニンが押さえた。内乱状態でも流通は止められない。食うものがなくなれば批判の矛先はこちらに向く。とにかく今は全国民を不足なく食わすことが先決だ。ユダはそれだけを言いつけて、国内の荷車、馬車、猫車すべてを大動員して農漁村から都市部に食い物を運んだ。

「あの、そろそろ建国を宣言したいんだけどな」レーニンがドアから首だけ出して言った。

ねないので組合を作り、その組合が全体を束ね、利益は公平に分配する。組合を作るのは農村でも漁村でも都市部の工業地帯でも同じだ。

これで各組合間に完全な意思疎通ができれば、他の組織はなにも要らない。しかし当面の間、組合間で生産の調整をして各種産物が不均衡にならないようにしたり、生産物が消費者に過不足なく供給されるよう、誰かがコントロールしなければならぬ。

そこで、各ソビエトから代議員を選んで首都ノヴゴロドに集め、会議で決めることにした。大丈夫かな、とユダは心配になった。話し合うと決められない人たちだから。特にしらふでは。

この改革で、農地、工場など、すべての生産手段がソビエトのものになった。もう誰も生産手段を個人で持つことはできない。

ある地方都市の年老いた靴磨きは、それを聞いて、自分が使っている靴を載せる台とぼろ布、靴墨などは生産手段だから、ソビエトに供出しなければならぬと考えた。純朴で律儀なその老人は、仕事道具一切を持って警察を訪れた。

「あのう、生産手段をソビエトに渡しに来ました」

「いいんじゃない。旗立てて盛大にやれば」
「それがね、国名が決まらないんだ。意見百出で」
「またかよ。どうしてどうでもいいことが決められないの。肝心なことは少しはできるのに」

「それがルーシ人なんだってば」

「わかった、今決めるよ。えーと、ソビエトルーシ社会主義共和国連邦っていうのはどうだ？」

「長いね。憶えられるかな」

「じゃ、略称でソビエト。これならいいだろ。正式なのは紙に書いとけばいい」

「紙と鉛筆貸してくれる？で、もう一回言つてよ」
かくしてソ連は建国した。

様々な見方ができるが、この社会体制は生産手段を労働者自身が取り戻したのもいえる。畑や工場を、そこで働く民衆が自分たちで所有する。そうすれば地主やら工場経営者やらがいないから、働いて儲けた分は全部労働者のものになる。夢のような形ではあった。

流通も、そこで働く労働者が経営者になる。ただ、個人がばらばらに経営すると以前と同じになりか

対応した若い警官は、受け取っていいのかわからなかった。「これは靴磨きの道具で、何も生み出さないだろ。生産手段じゃないよ」

老人は怒って「失礼な。靴をピカピカにするという価値を生み出します。立派な生産手段ですよ」

警官は仕方なく道具一式を受け取った。その日から毎日、朝になると老人は道具を受け取りに来て、夕方返すようになった。警察の仕事がひとつ増えた。

また別の街では娼婦たちが相談していた。私たちの生産手段はこの体でしょ。体はソビエトの所有になるのかしら？ 結論が出なかったので、みんなソビエトの役所に訊きに行った。

「世界で一番古い商売ですから、これは生産手段ですよ。ソビエトのものになりますか？」

役人は困った。そうだよな、生産手段の私有化は認められないんだから、この女たちはソビエトのものだろう。だが、どう処理すればいいのだ。

困っている役人に女の一人が言った。「私たちを役所に入れてよ。一人に一部屋ずつくださいな。そこで仕事をやるから」

このような些細な間違いや小さな誤解はたくさん

あつたものの、ソビエトルーシ社会主義共和国連邦における労働者独裁は完成した。

首都ノヴゴロド郊外で、ユダは五人の美少女に囲まれて快適に過ごしていた。多少カネは出したが、こういう政治リーダーの暮らしも悪くない。俺の一言でこの国はどうにでもなる。もうカネはかからない。これからは逆に儲かるかもしれない。儲かってこの暮らしか、最高だね。

革命開始からの一ヶ月間は眠る間もないほど忙しかった。なるべく血を流さない方針ではあつたけれど、見せしめや火急の際には仕方なかった。土地接収に抵抗する地主、建物の国有化に実力で歯向かう持ち主など、いわゆる資本家にどう対処するか、現場からいちいち伺いが来たのだ。そのくらい自分で考えろよ、と言いたいが、自分たちで考えられるくらいなら俺は不要だろう。ドブ板の架け替え方まで教えてやっているから、こんな生活ができるのだ。これもひとつの生産的な価値だな。

基本方針としては、資本家連中は、まず逃亡するに任せる。次に、逃げないやつは捕まえて、三角帽

いた。どうしてお前らは木を見て森を見ないのだ。森を作っている今、葉っぱ一枚に拘ってどうするんだよ。どうやらルーシ人に、ユダの民族のような合理性はないようだ。

その明白な証拠が、都市部からの報告で上がってきた。物流が止まっているという。生産地から送られてきた作物を、さっさと店に運ばばいいのに、どの店にどれだけ運ぶか明確な指示がないので、それを待っているという。野菜や魚はすでに腐り始めているらしい。

「今まで誰が指示してたの？」ユダがレーニンに訊いた。

「商人たちです。ほとんどがあなたと同じ民族でした」

「そいつらは？」

「最初のピラを見たときに逃げました」

なるほどなあ。溜め込んだカネを全部持って逃げたんだろう。

「それじゃ、どうでもいいから手近な店にすぐ運べ、と指令を出したらいい。従わないと死刑だ」

「それでもいいですが、もうひとつ問題があつて、

を被せて市中引き回しの上、遙か東のシベリアに流刑する。もっと過激に抵抗する資本家とその飼犬のゴロツキはリンチで殺してもお構い無しとした。

多少の恐怖政治は致し方なかった。どこにでもへソ曲がりや気難しい輩がいるもので、明るい未来を作ろうっていうのにソビエトに入りたがらない。組合に加入して共同生活するのもイヤだという。そんなのを許していたら、建国の最初から社会に綻びができてしまう。断固取り締まった。シベリアに行きたいか？と脅し、「行つてもいい」なら、逃げないように丁寧に護送してやった。

いずれにしても、逮捕して牢屋に入れるのはなるべく避けた。牢屋などすぐに満杯になるし、囚人にも食わせなければならぬからだ。無駄なこととはしたくない。それに、牢屋に『抵抗のリーダー』などを入れてしまったら、鎮火する火も消えなくなる。放逐するか殺すかのどちらかがいい。

案じたとおり、各ソビエトから集まった代議員会議は最初から紛糾した。この国の理念やら、政治理論やら、まだ国がきちんと動いてもないのに細かいことで対立し、すでにいくつかの派閥に分かれて

店が開かないんです」

「なんだよ、店員も逃げたの？」

「いや、店員はいるんですが、店を政府が接収したもので、店長というか責任者がいないんです」

どんな小さな商店も国営化されたのだ。店員は全員国家公務員になったから、上司がいないと動けないという。

「誰か、少し頭のいいのを店長に派遣すればいいだろう」

「頭のいいのは、みんなソビエトで議論してます」

「二番目に頭のいいのを送れ」

「二番目は農業組合に行ってます」

「三番目でいいよ」

「三番目は流通に使つてるのでダメです」

「四番目は」

「警察関係ですね」

「五番目でも構わないから」

「いいんですか？ほとんど使えない腑抜けばかりですが」

「わかった。軍隊を派遣しろ」

当面の間、商店の経営は軍隊に任された。この国

は大丈夫なのだろうか。

その軍隊にしても、とりあえずカネを撒いて黙らせているだけだし、カネで黙ってしまう程度の忠誠心しかない。警察も同じだ。ユダは早速思想教育を命じた。

少しでも骨のある軍人は、追い出した女王と一緒に逃げてしまった。残っている将校も兵も、軍隊でしか食えない連中なのだが、とにかく忠誠を誓う相手を女王から民衆に変えないとまずい。でも、連中にとつて、女王は目に見える存在だったけれど、民衆という抽象的な概念は理解できない。民衆が金をくれて食わせてくれると言つても、何のことやらわからないだろう。

そこで、あまりやりたくなかったが、赤旗といつしよに、革命の父レーニンを看板に立てた。「この旗に背くな、この人の言うことをきけ」ならわかりやすい。実は、こういう盲目的な崇拜要求は宗教とまったく同じで、一歩間違えば逆方向にも大暴走しかねない。暴走しないようにアホを縛るには規律しかない。ユダはレーニンの党から、なるべく融通の利かない石頭を選んで、軍隊と警察にお目付け役と

して送り込んだ。いわゆる政治将校である。

ユダにしてみれば、まだ誰も試したことのない国家体制の実験だから、少々ゴタゴタするのは致し方ないと思つていた。今のところ混乱は想定内にある。というよりスムーズに進みすぎている。死んでも女王を守るといつた狂信者もつといると考えていたのだ。全国的に、そういう馬鹿は数えるほどだった。女王の政治は本当に愛想をつかれされていたのだろう。

地主、経営者たち金持ちのうち、賢いやつは逃亡した。賢くない、主にルーシ人の金持ちたちは、積年の恨みで民衆に身ぐるみ剥がれ、間が悪ければ殺された。こういったリンチ事件など、いろいろ問題はあつたが、革命後三ヶ月くらいで国家は機能し始めた。都市部の店舗も、新たに任命した人民委員が店主になって再開していた。

この国の社会改革は世界のおちこちで噂になったようだ。レーニンに続こうと、外国からの留学生も集まつてきた。遙か東、唐の国からはマオ、ダン、リンがやつて来て、徹夜で猛学習した後、レーニンの党の幹部になった。ガリアからも留学生が来た

が、ハングリー精神に欠け、すぐに帰ってしまった。メイドに囲まれた優雅な生活に、ユダは心底満足していた。何を思ったかレーニンは、メイドの他にお楽しみ隊というのも送り込んできた。これまで政権にいた貴族の娘たちだという。ノヴゴロド郊外の、実質的な革命司令部で、ユダは安楽椅子にゆつたり座つて動く気はなかった。俺はあくまでも黒子だ。

ごく単純に考えれば、前の体制より新しい体制のほうが、民衆の生活は楽になるはずだ。生産から消費の間に、カネをすっぱ抜く泥棒がいらないのだから、その分だけでも物価は安くなって消費は伸びる。生産者の収入も増える。工業地帯から農村部への物資でもまったく同じだ。

これがさらに発達すれば、特にカネなどなくても生活は可能になる。どんな国民にも必要な物資が手に入るようになるからだ。カネは必要なく、所定の職場で誠心誠意働くだけで必要物資を手にする権利を得る。この国はそこまでやれるか？

やれなかった。

破綻の芽はたった一年で現われた。それも二ついつぺんに。まず、ある漁師が「イワシを運ぶのに三日もかかつては刺身にならないよ」と言い出した。政府が決めた流通経路だと、港から消費地まで、最短でも三日かかる。たしかに赤い目のイワシしか届かず、焼いて食べるしかない。しかしイワシの刺身やタタキは旨い。

これを聞きつけた流通業者が、「一日で届く特別便を始めます」と言った。その通称イワシ便の運搬料金は公定価格より一桁高かったが流行に流行った。都市部に運ばれたイワシは国营食堂には卸さず、専門の閤食堂、通称イワシ食堂だけで販売された。値段は牛肉以上だったが、毎日必ず売り切れた。

そのうちに鯛やヒラメもイワシ便で運ばれるようになり、閤の魚屋の店頭を飾った。閤魚屋はレーニンの党の役人にも人気があつたため、まず摘発はされなかった。

一方、国营商店の鮮魚は売れなくなった。今更誰が臭いがしそうな刺身を買うだろうか。犬やネコのエサに買う人はいたが、ほとんどが腐つて廃棄になった。国营商店で売れる魚は、カチカチに干した

干物や鰹節くらいになってしまった。

軍隊でも干物ばかり食っているわけには行かず、鮮魚の調達先は鰻魚屋になり、こうなるとイワシ便と鰻魚屋の存在は超法規的に公認されたのと同じになった。

特別便は農業分野にも飛び火した。やはり五日もかかって運んだイチゴは人気がなかったのだ。時間がかかってもいいジャガイモやタマネギなら国営商店で買うが、その他の生鮮野菜は通称イチゴ屋で買うのが当たり前になっていた。

政府はあわてて特別便の流通業者を洗い出し、反経済罪で裁こうとした。ところがこの流通網は複雑で、何人もの仲買が入っていて誰がボスなのかわからない。それに、もしも流通網を止めてしまうと、生鮮食品が市場から消えかねないところまで来ていた。そこで、流通網の撲滅より、仲買人に税金をかけることで「勝利」とし、お茶を濁した。

かくして国営の流通は破綻した。最後まで国が運んでいたのは穀物と石炭、それに材木くらいだ。

もうひとつの破綻の芽は生産現場にあった。

農民の生活は女王の時代に比べれば格段に良く

ボつても構わないだろう、という不遜の輩は計算に入れてない。だけど見たところ、この国の全員が不遜の輩みたいだな」

「それが国民性でして」レーニンは無言で言った。

国民性まで考えていなかった自分に、ユダは少し腹が立った。ユダの民族は、常に何かしていないと生きてる気がしない気質だから、ごく自然にこの国の民族も同じと思いついてしまったのだ。大間違いだな。ネコにワンと吼えるは無理だ。

「じゃ、生産現場に責任の概念を持ち込もう。簡単に言えばサボるなということだが」あまり気乗りしないままユダが提案した。こうなるから組織はイヤなのだ。少し考えればわかることを、わざわざ命令するなんて。言われなきゃわからん低脳が多すぎる。

各工場と各農業組合に生産高割付、つまりノルマが課された。たとえば竹細工工場なら、一ヶ月に孫の手三千本と扇子の骨を一万組作れ、といった風に。クリアしなければ正規の給与は支払われず、厳しい査問委員会に出なければならぬ。農場にも作物と収量が指定された。

ノルマは達成されたかに見えた。工場からは指定

なった。かえってそれが災いしたのかもしれない。農民は遊ぶ時間を欲しがるようになり、生産意欲が低下したのだ。ひとつには『全員平等』の原則によって、多少サボったところで給金は変わらないから、みんなは等しくサボるようになった。最後には、決められた時間だけ農場にいれば、働こうが遊んでいようが給金をもらえろと思いつくようになった。

工場地帯でも炭鉱でも事態は同じで、とにかく働かないのだ。党から検査官が行ったときだけ熱心に働いて見せる。誰かスパイが、検査官の行く日を教えているに違いない。そこで抜き打ちの検査をかけると実態が丸見えになった。就業時間なのに職場には誰もいない。工場の裏手から楽しそうな声が聞こえるので行ってみれば、男の工員はメンコで遊び、女はオハジキをしていた。そしてなんと、彼らを指導する立場の政治将校が真っ先に酔っ払っていた。

「こりゃダメだよ」ユダがレーニンに言った。「そもそもこの体制は性善説を前提にしているんだ。一人はみんなのために、みんなは一人のためにを实践することで経済が回るようになってる。おれひとりサ

量の物資が出荷されたし、農場でも言った通りの小麦が取れた……ように見えた。しかし、たとえば鉄は、金槌で叩くと崩れ散るような品質だった。小麦は、収量の査定係が行くと近隣から借り集めたものを見せていただけで、査定係が酔っ払っている間に小麦は次の村に運ばれ、同じ小麦が何度も計られていた。

産業は急速に疲弊した。農業ダメ、工業ダメ、流通は裏街道ばかり。それらを統治する機構も賄賂でしか動かなくなっていた。

「馬鹿馬鹿しいからもうやめよう」ユダは嫌気が差した。

「戦争でも起これば少しは引き締まるかと」レーニンにはまだ希望があるようだ。

「知ってるぞ。女王時代の最後に、東洋の片隅の三流国と戦争してズタボロに負けたのはどの国だ。負けてなけりゃ、極東の駅馬車の利権を手放さなくて済んだのに」

市場原理導入

ユダが抜けてしまえばこの国に未来はない。少なくとも今の社会主義体制は続けられない。指導部の偉いさんは自分の銅像を建てることばかりに熱心で、国の状況など誰一人として気にしていないからだ。どうしてこうなるのだろう。もっと良い生活、もっと楽な生活、人間はそればかり追い求める。たしかに悪いより良いほうがいいし苦しいより楽なほうがいい。向上心があるのは結構だが、手段の良否までは考えないところが人間の限界なのか。

この国にユダは、以前より多少はましな体制を作ったと自負していた。生活は良くなったはずだ。それをもっと良くしたいのは当然だろうが、他人の分を横取りしてまで生活を良くしようというのは、結局のところ俺の民族と同じじゃないか。きっとそういう生き物なんだ、人間って。虎が飢えていてもライオンは気にしない。いや、虎が死ぬのを待っている。

この国で社会主義体制を維持し続けようとするな

きや」

アヘンを吸いながら聞いていた中国人三人組のうちダンが、丸っこい顔に笑みを浮かべて言った。

「そうですね、実態を批判しても始まりませんから。時代背景に従って思想も変えるべきです。これは修正主義ではありません。そうでしょ？」

他の二人のうちリンは頷いたがマオは渋い顔をした。マオが言った。「だが、あくまでも主体は人民でなければ。資本主義という張子の虎が再び世界制覇するのは許されぬ。だいいち、俺の立場がないだろう」

「思想も立場も神様も宗教も関係ない。うまく行かないんだから、もうやめるしかないだろ。多分、この国に社会主義は合わなかったんだ。相性が悪かったんだ」ユダは以前から革命理論など信じていなかった。神の無謬性を信じないのと同じに。

レーニンが目覚まして「ところで来年からの工業発展十年計画を」と言いかけた。

「ねえレーニンさん、目を覚ましてくださいよ」ダンが、笑みをもっと大きくして遮った。「今さっきあなたも賛成しましたよ。憶えていませんか？こ

ら、残っている手段はひとつしかない。強権政治、警察国家だ。ルール違反を徹底的に摘発して、犯人は無罪を言わず極刑に処す。どんな小さな違反も見逃さず、密告も奨励する。国民どうしが見張り合い、隣人同士の挨拶でも顔がこわばる世界にする。それしか生き残る方法はないだろう。

人間は神に選ばれた生き物だと教えられた。野獣とは一線を画す優秀な生き物のはずだ。本当にそうだろうか？ 宗教、経済、社会体制、いろいろやってみて、俺には怪しく思われてならない。結局のところ、人間も野獣も弱肉強食を旨とする同レベルの生き物なのだ。いや、人間のほうがより悪い。平気で騙すし嘘をつく。徒党を組んで相手を陥れる。白を黒と言って憚らない。こんな人間を、神が選んだはずはない。神がいるとして、そして神がカウラ馬鹿でなければ。

「俺はそろそろ引退するよ」ついにある日ユダが言った。レーニンはその横で酔いつぶれていた。「無責任なようだが潮時だよ。女王の滅茶苦茶な政治から、民衆をいったん解放しただけでも良かったと思わな

の国に市場原理を導入します。働く人たちが全員に競争してもらって、豊かになれる者から豊かになる、そう決めたでしょ」

「そうだったけ？ ああ、思い出した、そうだよ。そう決めたんだっけ」

引越しは大仕事だった。子どもを産んだメイドとお楽しみ隊員がユダに付いて行くことになったからだ。子どもがなくても付いて来る女性も多かった。引越しの荷車の列は延々と続き、全員が港に着くまでに一週間を要した。

引越し先は新大陸のソルトレイク湖と決まっていた。選んだ理由は、そこには何も無いからだ。実はその前にミズーリ州とイリノイ州に引越そうとして先住民から断られていた。ユダがまた面倒を起こすと思われたからだろう。ユタ州のソルトレイクには人間などいないから断られようがなかった。まあ、どこでもいいや、何もなければ。

このときユダは、初めて自分の手で何かを一から作ってみたい気分になっていた。これまで、イエス、証券屋、国家、どれも誰かや何かを利用していた。

今度は自分が中心になって始めてもいいだろう。

新大陸に着いたユダは、まず名前を変えた。ジョーン・ドウとしたかったが入管で殴られそうになり、急遽ヨセフ・スミスにした。こっちはジョセフと読むらしい。ついでに、もっともらしくジュニアも付け加えた。

説明するまでもなく、この後ジョセフことユダは新宗教を始めることになる。なにしろイエスと一緒にいたのだから、それは最大の売りだ。砂漠で流星も見たので、神と会話したと言ってもいいだろう。全体としては新味はないが、ユダがこれまで納得できなかった教義を省き、イエスの宗教を現代的にアレンジした新宗教になった。そして、原罪なんか無いんだ、イエスは神じゃない、聖霊など御伽噺だ、と言いつつ放つたら、ローマ法王庁から「異端ですよ」と怒られた。おう、異端結構。イエスとメシ食ったこともない連中がよく言うよ。ユダは笑い飛ばした。イエスが生きていたら、どっちを異端と呼ぶだろう。多分、両方だろうな。

一番困ったのは、ユダに多くの妻たちがいること

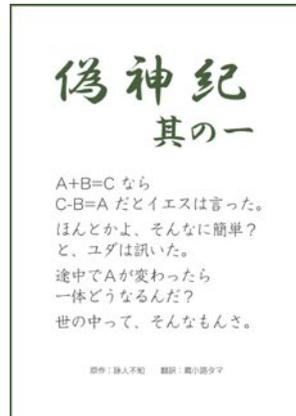
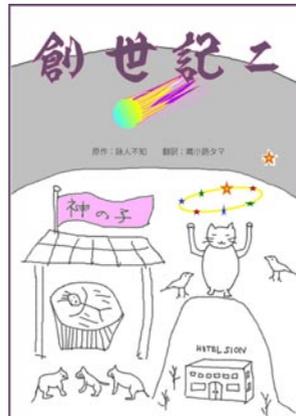
思い起こせばベツレヘムで不良をやっていた自分が、良い悪いは別として古い宗教に風穴を開け、世界のバーチャル経済システムを作り、奇想天外な社会実験を主導した。波乱万丈な人生じゃないか。今は新大陸の田舎住まいだが、信者たちの精神的な支柱にはなっている。俺は人生をコンプライトしたな。ただ、つくづく思う。人間ってなんて馬鹿なんだろう。あまりにも自分で考えなさすぎ。目の前のものを盲目的に信じ込みすぎ。疑いを知らない無垢な存在といえれば聞こえはいいが、それって自分の地平にかじり付いて、視点を動かさないだけじゃん。もつと疑えよ。本物を探せよ。そんなに簡単に信じるなよ。しかし一面、人間って、内心では常に自分が世界で一番なのだ。その自尊心、どこから来るの？

山間の清浄な空気の中でイザヤベンダサンの子、ユダは息を引き取った。家族を集め「これからは各自勝手に生きて勝手に死ね」が最後の言葉だったという。

だ。しかし、ユダの育った古い宗教でもイエスの宗教でも、一夫一婦制でなければならんとは教えていない。最近、ローマがそう言い始めただけだ。たしかに一夫多妻は今の世には合わないけれど、俺には現実だから仕方がない。ユダは新宗教で一夫多妻を認められることとした。今更誰か一人を正妻にして、他は妾というのはいさかいさうだから。

一行は寒い冬を乗り切り、春に種を蒔いて秋には収穫した。外部から新参者も加わり、ユダのコミュニティは順調に育って行った。いつしか集落が村になり、街になり、都会になった。子どもたちが大きくなるとユダは学校を作った。小学校から大学まで、有り金全部注いだと言ってもいい。この世はカネじゃない、教育だよ。何となくそう思ったからだ。

ユダの新宗教は生き残った。若者に布教活動を義務付け、清潔で純情そうな風体の若者が、ひたすら戸別訪問した甲斐もあって、世界中に組織や支部ができた。今では世界中の多くの家庭が、そういった若者を道端で見かけると玄関ドアに鍵をかけ、ノックにも答えないようにしている。



著ネコ近影 翻訳って疲れる。やればわかるよ。

民衰記 経世済民

発表日

エチオピア暦 2006年 8月 20日

フツアの西暦では 2014年 4月 28日

著ネコ：蔵小路タマ（図版も）

仕方なく著作権管理させてる人：大塚 明

いないだろうけど、転載するときは管理人に言ってね。黙ってやったらヒッカク！



つーわけで、ユダ伝みたいなものでした。

こんなことしてたんだ。偽神紀で仕掛け屋だとは知ってたけど、目の付け所とタイミングを読むのがうまいんだね。アタシみたいなせつかちだと、世の中動かすの難しいよ。やっぱり民族の血っていうか、あるんだろうな。

ユダの子孫は新大陸で大成功したみたい。巨大なサメが人を襲う映画を作ったステーキヴンとか、フォークソングを歌ったボブとか、スタバっていう美味しくもないコーヒー屋の創業者とか、とにかく仕掛けがうまいんだ。たまにはカラ回りもいて、才能の無いのが一発でわかるジョンソンもユダの子孫。もし今、新大陸からユダの子孫たちが全員引越したら、新大陸のお金は半分以下になっちゃうだろうな。

といって、本当にユダが新大陸に来たのかどうか、アタシは知らない。弁慶がジンギスカンになったっていうのが事実なら、ユダも来たんだと思う。そうなるといエスも東洋で死んだことになって、市界文書の上を行く歴史の書き換えが必要になるかも。それはそれで楽しそうだけども。

この次あたりから神様と人間の亀裂が広がり始めるんだ。全面戦争に突入か？ 神は怒りの鉄槌をあっちこっちに振り下ろすか？ お楽しみに。

ふーじゃ、またね。

タマ